

仏の願い

平成 27 年 西雲寺だより 早春号 (40 号)



イスラム国による、日本人の人身質殺害事件以後も、イスラム国によるテロや残忍極まりない人身質殺害事件は後を絶たず、報復のための報復の戦火がやまない。

私たちはこの度のイスラム国の行為に対して言葉にならないいきどおりを感じ、イスラム国を非難した。安倍首相も強い調子で「絶対に許さない。必ず罪を償わせる」と述べた。

しかしこの首相のことは、とばがアメリカのある新聞にとりあげられた。日本の首相からこのように激しい非寛容なことばが発せられたことに違和感を感じたのである。日本人が忘れていた大切なものを指摘されたように感じた。

もくじ



2～3 ページ	親鸞聖人とその門弟たち
4 ページ	寄稿 佐々木靖夫さん
5 ページ	寄稿 鈴木法雲さん
6～7 ページ	寄稿 島田薫・浩美・雄二・一美ご一家
8 ページ	山門掲示板 投稿 渡辺嘉子さん

親鸞聖人とその門弟たち

門徒集団の形成

建暦元(一一二一年)年、流罪から五年後、親鸞聖人は赦免(しゃめん)された。その後、二年ほど越後に止まった後に関東へと旅立つ。四十二歳のときであった。当時の関東は、鎌倉幕府が開かれ、新しい思想、新しい考え方を持った人々が生きる場所であった。「念仏を広める」という師・法然上人の教えをこれから実践しようとしていた聖人にとって、まことにふさわしい場所に映ったのであろう。京都に戻れば再び念仏が弾圧される恐れもあったし、師である法然上人はすでに京都で亡くなっていた。こうした状況も、関東へ向かう契機になったのかもしれない。

関東に移り住んだ一家は、常陸国(ひたちのくに茨城県)を中心に、約二十年を過ごす。関東では念仏布教に励んだとはいえず、最初から布教がうまくいったわけではないだろう。常陸国には東国一の鹿島神宮があり、また真言宗など既成の仏教が根づき神仏習合(しんぶつしゅうごう)の状態であったと思われる。また山伏弁円のような修験者(しゅげんじ)もおり念仏の教えが土地の人々に受け入れられるにはかなりの年月を要したのではないだろうか。聖人のご苦労が偲ばれる。しかし聖人はつねに民衆とともに、そして家族とともにあった。土地の人々は次第に聖人の人格や人間性に信頼を寄せるようになり、その教

えを聞くようになっていった。

門弟の名を記したものに「親鸞聖人門侶交名牒(もんりよきょうみょうちよう)」というものがあるが、これによると門弟数は常陸(茨城県)が二十、下総(しもうさ千葉県)四、下野(しもつけ栃木県)六、武蔵(東京都)一、陸奥(むつ福島宮城岩手県)七、越後(新潟県)一、遠江(とおとうみ静岡県)一、洛中(京都)八、の四十八名となつてゐる。このような親鸞聖人から直接教えを聞いた面授のお弟子たちを中心に、数千人の念仏者がおつたものと思われる。

親鸞聖人が関東の地を離れて以後、聖人の教えを受けたこれらの念仏者たちは、法然上人の命日の毎月二十五日に寄り合つては仏法聴聞して念仏をして、門徒としての自覚を深めていった。これが門徒集団と呼ばれるもので、やがて有力な門弟を中心に集団化していき、それぞれ所在する地名を冠して呼ばれるようになった。

真仏を中心とする高田門徒(下野・栃木県)
順信を中心とする鹿島門徒(常陸・茨城県)
性信を中心とする横曾根門徒

(下総・茨城県 千葉県)
教念を中心とする布川門徒(常陸・茨城県)
善性を中心とする蒔田(ふうきた)門徒

(常陸・茨城県)
光信を中心とする荒木門徒(武蔵・東京都)
常念を中心とする佐島門徒(下総・千葉県)
覚円を中心とする浅香門徒

(陸奥・福島県 宮城県 岩手県)
如信を中心とする大綱(おおあみ)門徒

(陸奥・福島県 宮城県 岩手県)

などが有力な門徒集団であった。特に高田門徒の教線は東北地方から東海地方まで及んだ。仏光寺も高田門徒の流れをくむものであるが光信を中心とする荒木門徒が発展したものである。

親鸞聖人滅後、聖人関東布教時代の高弟二十四輩の名を一覧にした「二十四輩牒(にじゅうよはいちよう)」が著された。そのなか、横曾根門徒の性信が二十四輩中第一、高田門徒の真仏が第二、鹿島門徒の順信が第三とされている。

「歎異抄」に「親鸞は弟子一人もたずさうろう」と記されているように、親鸞聖人は阿弥陀仏の本願を信じ念仏する人々を「御同朋(おんどぼう)」と御同行(おんどぎょう)と呼んで敬愛の念で接した。生涯、一寺を建てることなく、教団化する意志さえもたなかった。だが聖人滅後、門徒集団は有力門弟を中心に門徒教団として発展していったのである。

親鸞聖人の門弟たち

性信(しょうしん)

「親鸞聖人のいるところ必ず性信あり」といわれた性信は、聖人より十四歳年下で、鹿島神宮の大宮司、大中臣(おおなかとみ)氏の系に生まれた。幼いころから腕白で、「七十五人力の悪太郎」と呼ばれたほどの怪力無法者だった性信は、十八歳のとき、宮中の相撲の会に召され、天覧相撲に勝つて恩賞を受けた。その帰り、熊野権現に参籠し夢告を受けて京都東山吉水に法然上人

を訪ね、専修念仏の教えを受ける。法然上人が高齢だったため、高弟の親鸞聖人に預けられ、「性信」の法名を授かった。聖人と性信の師弟関係はここから始まり、越後流罪、常陸への移住にも随行し、聖人が京都に帰るまで三十年ものあいだ行動をともにしたのである。性信は聖人が京都に帰る際にも同行したが、聖人から常陸に戻って同行を導くようにとされ、箱根山で涙の別れをする。そのとき、聖人は「教行信証」草稿本や手道具が入った笈(お)を性信に授けた。この草稿本が坂東本(ほん)とうぼんとして知られるもので国宝である。

親鸞聖人帰京後、晩年に関東において異義がおこり、門弟(念仏者)が鎌倉幕府に訴えられたという事件が起るが、その際、性信は関東の門弟たちを率いて幕府と対峙し勝訴にもちこんでいる。聖人はお手紙のなかで性信の苦勞を称えておられる。

真仏(しんぶつ)

真仏は下野国(栃木県)の真岡(もおか)城主大内春国の子といわれている。親鸞聖人とは三十五歳も年齢が離れており、聖人が四十二歳で関東に来られたときまだ七歳であったことになる。

聖人が六十歳で京都に帰ったときは、真仏は二十五歳である。いずれにしても、若い時代に聖人の門弟となった真仏は熱心に勉強したものとされる。親鸞聖人のお手紙のなかに、真仏宛のものが三通あるが、内容は学問的で非常にむずかしい。真仏はお手紙の内容を理解できる十分な素養を持っていたのである。

親鸞聖人は、五十三歳のとき、常陸国と下野国(栃木県)の国境の山々を越えて下野国に入られた。聖人は稲田を拠点として各地に出向いて布教活動を行っており、新たな地で念仏布教するためであった。聖人はこの地で夢告により、長野の善光寺から一光三尊仏を迎え、真岡、真壁、小栗の城主が協力して高田の地に如来堂を建てた。聖人はこの如来堂を拠点として布教活動に励まれたのである。

聖人が六十歳頃京都に帰られるとき、真仏に後を託された。如来堂は専修寺と呼ばれるようになり、聖人から受け継いだ真仏は、娘婿である顕智(けんち)と協力して念仏布教に尽力した。この専修寺を核として発展したのが「高田門徒」であり、性信を中心とする横曾根門徒、順信を中心とする鹿島門徒と並び称せられる関東の有力門徒の一つとなった。

真仏は、親鸞聖人に先立ち、五十歳で亡くなってしまい、そのとき聖人は八十五歳であった。力にしていた真仏を失い、聖人はずいぶんと嘆かれたそうである。真仏は仏光寺派の親鸞上人につぐ歴代の第二代になっている。

順信(じゆんしん)

順信は正式には順信房信海といい、鹿島神宮の神官の息子であった。順信にはおもしろい伝えがある。親鸞聖人の稲田の草案に毎日通う白髪の老人がいた。百日間の日参を終えた老人が、念仏の仲間に加えてほしいというので、聖人は「信海」という法名を授けるが、実はその老人は鹿島明神の化身だった。神殿の戸帳の

なかにその法名を見つけた宮司の信親は「これは鹿島明神が親鸞聖人に帰依したに違いない」と親鸞聖人の偉大さに驚き「私は神に仕え、子供は仏に仕えましょう」と申し出る。そこで聖人はその子に「順信房信海」の法名を授けたというのである。

当時、鹿島神宮には神宮寺という神社に付属するお寺があり、経典を多く所有していたことから、聖人は稲田からたびたび鹿島・行方(なめか)地方を訪れていた。順信はそのとき聖人から教えを受け、聖人と共にこの地方の布教に力を尽したのである。

唯円(ゆいえん)

唯円は俗名を北条平次郎といい、かつては信仰心のない乱暴者だったという。平次郎の妻は親鸞聖人の熱心な信者で、稲田の草庵にしばしば参詣していた。聖人はそんな妻に自筆の名号を渡したという。あるとき夫の留守中に名号に向って念仏を称えていると、平次郎が突然帰ってきて、名号を他の男からの恋文だと勘違いし、怒り心頭にきて妻を切り殺してしまった。死骸を竹藪に埋めて家に戻ると、なんと死んだはずの妻が出迎えた。驚いて竹藪を掘り起こすと、そこには血に染まった聖人自筆の名号があった。唯円はこの一件で目が覚め、聖人の弟子となったという。

有名な「歎異抄」は唯円が著したものとされ、第三条の「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」のおことばは、唯円の深い罪業感から生まれたものであろう。(住職)

母を想う

この三月で、母が九十一歳で往って四年になります。一月の秋廻りの報恩講に、若さんから「もう四年ですね。おばあちゃんのことなど何か書いて」とのお話を頂きました。今までも、一周忌、三回忌、毎年の秋廻りの報恩講にと、顔を合わせる度にその話で、「やっぱり書かんといかんかな」という気にさせられてしまいました。

紙とペンを出して、さあ書こうかと思いついて、いくら思い返してみても、思い出されることは母から「してもらった事」ばかりです。

二十歳で兄嫁の兄へ嫁いで（夫の妹が母の兄嫁なのです）、四年半で夫を戦病死で失い、四歳九カ月の私、二歳三カ月の長女、生後三カ月の次女の三人の子供を育てるのはどんなだったか、私達にはとうてい理解できるものではありません。

二十五歳で後家となり、気苦労から二十代、三十代は「神経性心臓病（今のうつ病と思われる）」で、日赤に入退院をくりかえしていました。

私達が成人してから、「子供三人とひきかえでも父さんに生きていて欲しかった」と何度も聞きました。本当にそうだったろうと思います。「子供三人と数珠

つなぎになって大味の浜に入ろうかと何遍も思うた」とも幾度も聞きました。そんな中で育ってきた自分が、母親にどんな事をしてあげられたか、いくらい思い返しても一つも思い当たることがないので。なんてダメなバカ息子だったのかという事ばかりが思いおこされ、こみあげるものがあります。

前立腺と共に劣化している涙線のバルブが、この度著しく刺激され大変困りました。予想はしていたのですが、そのマグニチュードは想定外でした。

一つだけ良かったな—と思うことは、親より先に往く事なく、父親の五十回忌、母親の葬儀、そして三回忌まで出来た事です。愛する、大事な息子に先立たれるという逆縁に合われた叔母二人をみていますが、哀れで可哀想で、かける言葉もありませんでしたから。

「親の葬儀をするなんてことは当たり前で」「大したことでも何んでもない事」ただの慰めであり、自己満足にすぎんだと、又々涙線がモゾモゾして来ます。

「西雲寺の若様を恨み倒して」ペンを置きます。

武周町 佐々木 靖夫

心の痛み



正月早々、ふくらはぎの肉離れをやってしまった。理由は、近所の子供と駆けっこをしたのです。元来が負けず嫌いですから、勝つつもりで一步を踏み出したとたん、激痛でひっくり返ってしまいました。

さあ、それからが大変です。痛くて、歩けないのです。事は自業自得でありますから、辛抱するしかありません。見かねた友人が、良い腕の指圧師が居るからと、車に乗せて、連れて行ってくれました。

幸い、正月明けで空いてしましたから、待つまでも無く、奥から先生が現れました。如何にも力の強そうな巨漢です。事情をお話し「お願いします」などと言いながらマッサージ台の上にうつ伏せになりました。施術前に「少し痛いですよ」と言われましたが、私は、元来我慢強い！

しかし、まさか一番痛い所に指を突っ込んで、渾身の力で押されるとは、夢にも思いませんでした。結果、数十回の悲鳴と数回の失神を繰り返したのです。「終わりましたよ」と言われたとき、意識は無かったように思います。

目から吹き出た汗を拭きながら、友人の車で帰りましたが、どの様な道を通ってくれたのか、覚えがありません。お蔭様で、翌日から何とか歩けるようになりました。痛みはありますが、日に日に良くなっています。日ごろ、

特に不自由無く過ごさせて頂いていますと、その様に過ごさせて頂いている事への感謝を忘れていました。

私たちは、肩こりや捻挫など、体に痛みが生じた場合、その治療方法は、幾つもあります。しかし、案外すぐに気づかないのが、心の痛みでは無いでしょうか。知らず知らずのうちに、自身の心を傷つけてしまったり、あるいは、家族や友人を傷つけてしまう事があります。

今回の私のけがの場合は、原因と痛みがはつきりしており、今後、その様な事に注意をすれば、ある程度は、防ぐことが出来ます。しかし、自身であれば他人であれば、心のダメージを与えてしまう事を防ぐには、どの様な事に注意をすれば良いのでしょうか。

答えは、最も身近な所にあるのです。私たちは常に弥陀の働きかけの中で、生かさせて頂いています。

弥陀は、何時も、それで良いのかと問うておられます。気づくと、申されています。

私が救うと、申されています。

あり難いのは、この働きかけに一度気付かせて頂くと弥陀は二度とお見放しになりません。

弥陀に、お尋ねいたします。

ああ、今日も気付かせて頂いた。

今も気付かせて頂いた。

お礼の言葉は、心の中で、南無とたてまつる。何時も、南無とたてまつる。



吹田市 鈴木 法雲

父は、1年8ヶ月前に、末期の肺がんと診断されました。

私はその時、とうとう我々にも、つらい看病生活がきたと思いました。担当医が手術はできないと言った時、目の前が真っ暗になりました。立ちくらみみたいな、初めて感じた強いものでした。

ただ一つ、手術はできないがイレッサという肺がんに良くきく薬があるといわれました。8mmぐらいの赤いツブの薬でした。毎日一錠飲んでくれと言われ、私は、そんな薬でガンに勝てるのかと疑いました。しかしビックリする事に、半年飲み続けた父の肺がんが半分に小さくなりました。日赤の先生には、感謝の気持ちで一杯でした。

でも1年が過ぎた頃、夕食を食べたくないと言った様になりました。私は少しでもいいから食べてくれと言いました。父を日赤へ連れて行ったところ、腎臓や肝臓に転移していました。イレッサの薬の効用は10ヵ月程度だそうです。残る手段は抗ガン剤治療だけだと…。また私の目の前が真っ暗になりました。

でも、よくここまで頑張った父は、強い男だと思いました。

一度だけ抗ガン剤治療をしたところ、はきけや微熱が下がらず、1回でやめる事にし、その後、退院して自宅でみる事にしました。なぜか、少しずつではあるが、食欲がでてきたので、本当にうれしかった。その後、家族みんなまで看病し、とうとう1月11日午後21時3分に亡くなりました。

よく1年8ヶ月もがんばって生きた、その父は私にとってすごくカッコよく、強く、また世界で一番尊敬できる人です。本当に今までありがとう。そしてさようなら。また、あの世で会ったら、一緒にお酒を飲みたいです。
福井市 島田薫（長男）

温かな



子育て

義母の忌明けの次の日に、義父が他界した。そして、その2週間後に私は仕事に復帰した。

約2ヵ月ぶりの仕事は疲れた。ほんの2か月前までは、帰宅すれば両親がむかえてくれた。今では、仕事から帰っても台所は暗く、寒い。お仏壇で手を合わせ、「お父さん、お母さん帰りました。ありがとうございます」と言うと、今は本当に二人ともいないのだと思うと、さびしくて涙があふれてくる。

思い出すのは、窓側のソファにちょこんとすわり、手には大好物の甘いもの、TVで歌謡ショーでもやっていたなら、それはもう本当に嬉しそうに笑っていた母。その傍らで寝そべって同じく笑っていた父。

その光景を思い出すと、日がたった今のほうがつらい。

周りの人はよく「大変だったね。ご苦労さんやったね」と言ってくれたけど、両親とも私には何の苦労もかけずに逝ってしまった。

母は末期のすい臓がん。在宅医療の準備も整いあと一週間で退院という時、母は逝ってしまった。私に苦労をかけるのが悪いと思ったのか…。母の看病にと申請した介護休暇はそのまま父のためにとり、在宅医療の準備もそのまま父用が変わった。父のために母が準備したかのような感じ。在宅医療は本当に素晴らしかった。介護ベッドも借りれ、毎日のように点滴もしてくれた。週に一度はお医者さんもみってくれ、看護師さんは毎日よくしてくれた。お風呂に入れてくれたり、体をもんでくれたり、いたれりつくせりだった。病院ではできないことをしてもらい、本当に普段通りの生活をしていた。母にできなかったことを父にできたことが、せめてもの私の救いだった。またそれも母の望んでいたことかもしれない。父を家でみることで、弟家族が毎日のように見舞ってくれ、また私をも気遣ってくれた。母の葬儀の時からも良くしてくれ、協力し合って有難かった。両親にとって、私たち家族と弟家族が仲良くやっていくことが一番喜んでくれることだったと、今さらながら気づいた。

そしてもう一つ、七日参りのお寺様に教えて頂いた「南無阿弥陀仏」の意味、「南無阿弥陀仏」には感謝と懺悔の二つの意味が込められていること、毎日仏壇に手を合わせ、心の中でくり返す、「お父さん、お母さん、ありがとうございます。そして、何も恩返しができずにごめんなさい」そんな思いを込めて「なんまんだぶ 南無阿弥陀仏」ととなえている。

浩美（長男の妻）

父が肺がん末期のため治療を諦めた際、母に「母ちゃんしか家で見る者がえんのやでしっかり看病して、優しくしてやらなあかんぞ」とあおりたて、父の死に向きあうようにしました。1年余りが過ぎ、今度は母が突然すい臓がん末期の宣告。今、思い出すと、知った時が今迄で最悪の絶望を感じました。不安で不安で夜は寝れず、夢は怖いものばかり。両親に対して今までしてきた親不孝や、いやらしさが頭に浮かび、後悔と懺悔の日々でした。

母の病気は、壮絶なもので入院2ヶ月弱でしたか、つらく暗い思い出ばかり。病と闘わせる為に怒った事もありました。治るはずもないのに励ましたり、勇気づけたり、ウソをつくのが嫌で嫌で、ひとりになる車の中では、声を出して泣く日もありました。病院生活が寂しいだろうと、毎日足を運びましたが、病は進行し、苦しみながら77歳で他界。気力も体力も失せて、元気もなくなってしまいました。母の死は思っていた通り悲しかったです。

しかし、父がまだ闘病中でしたから、母にしてあげられなかった“自宅で看とる”という目標で在宅医療に切りかえました。義姉の絶大な協力、在宅医療の先生、看護師さん、皆が密に連絡して1ヶ月余り“1日でも長く少しでも楽に穏やかに”と父の世話や看病をしてくれました。母の入院闘病生活からは考えられないくらい理想の看護で、私は悲しみの涙ではなく、ありがたさや感謝の涙があふれ胸がいっぱいになりました。在宅医療から1ヶ月半、父は安らかに苦しまずに81歳で他界。顔は何か笑っている様にさえ見ることができました。

生前の父は職人気質で無口な人。若い頃3ヶ月位一緒に仕事をして、物言わず黙々と仕事をする姿に「忍」を学びました。陽気で、まぶしい太陽ではあるが、気弱な影の一面も見せた母。「一礼して、会社に入りなさい。」「太陽さんを持って一日を過ごしなさい」と「感謝の心」を教わりました。

2人ともありがとう。2人のおかげで家内とも出逢えて、4人の子供にも恵まれました。本当に感謝です。母の死後、絶望で悔やみきれない後悔の日々でしたが、何故か分からないのですが、父を看病・看取るうちに気持ちが安らかに、軽くなっていきました。私の心を救ってくれたのも父のおかげかと思います。合掌 雄二（次男・50歳）

厳粛で

最期の

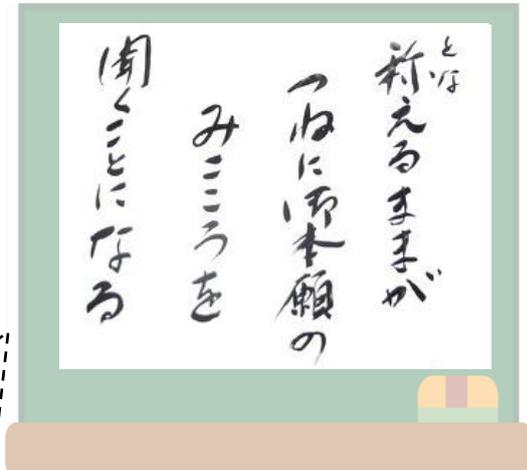
昨年の3月、両親と私達夫婦と娘の5人で、大阪へ相撲を観に行きました。それが母とも最後の旅行になるとは、その時は誰も思いませんでした。父だけでなく母までもが末期のがんと告知され、家族全員の一人一人のショックは、言葉にしないものの、とても大きなものでした。

がんと言われてから母は気弱になり、よく私達の前で涙を流していました。その姿を見るのが、とても辛かったです。主人は、朝夕病院へ通い母の世話をしていました。子ども達も、それぞれが時間を作っては見舞いに行ってくれました。私も、病室で母と色々な話をしました。今までの事やこれからの事沢山話しました。病室が孫達でいっぱいになる事が多くありました。そんな日々も僅か2か月で終わってしまいました。母の最期の日には、父も痛い身体で病室まで杖をついて来てくれました。本当に多くの人が見舞いに来て、たくさんの孫たちに囲まれて母は逝きました。皆本当にいっぱい泣きました。

その後、父は訪問看護サービスをうけ、病院ではなく自宅で過ごしていました。病院とは違い、私達は時間に関係なく、いつでも父の顔を見に行く事が出来、一緒にテレビを見たり、大きな声で話したり、笑ったり、爺ちゃんのベッドで寝たり…。小学生の娘は、お姉さんが入浴の介助をしているのを見て、私も！と、ズボンをまくり浴室へ。爺ちゃんの背中を楽しく洗っていました。父が亡くなる日の午前中には、看護師さんに教わりながら、孫達が身体を拭いたり、口腔ケアをしたり。そんな、子ども達の優しい姿を見ると、それは、父や母が今まで孫達にしてくれた事、教えてくれた事がそうさせているのだと思い、父や母に感謝の気持ちでいっぱいです。父は、母の四十九日法要と孫の成人式に行く姿を見届けホッとしたのか、母の死後45日目に母のところに逝きました。

両親が一度に亡くなる事はとても辛く悲しい事です。しかし、私は多くの人に、両親仲が良かったのですねと言われました。本当にそうかもしれません。きっと、両親は二人で何時までも仲良く遠くから、私達家族を生前と変わらぬ温かい眼差しで見守ってくれていると思います。両親に見守られて、皆仲良く暮らしていきたいです。 一美（次男の妻）

山門揭示板



今日、お念仏の聲が聞かれなくなりしました。何故でしょうか。何か自尊心のようなものが邪魔をしているのでしょうか。

南無阿弥陀仏の名号は名となつて下さつた如来さまです。如来さまといつても私たちは見ることも触れることもできません。だから如来さまは南無阿弥陀仏というみ名となつて、そのみ名に如来さまの願いを込めて、どうかみ名を称えて、わが願いに目覚めてほしいと呼びかけて下さるのです。

如来さまの願いとは、如来さまの大悲で荘厳されたまことのいのちの世界、お浄土へ迷いの私たちを呼び返して、本当のいのちのよろこびと安らぎを与えようとされるのです。私たちは長い間娑婆においていただいて本当のいのちのよろこびを感じていないでしょうか。何か虚しいのではないのでしょうか。

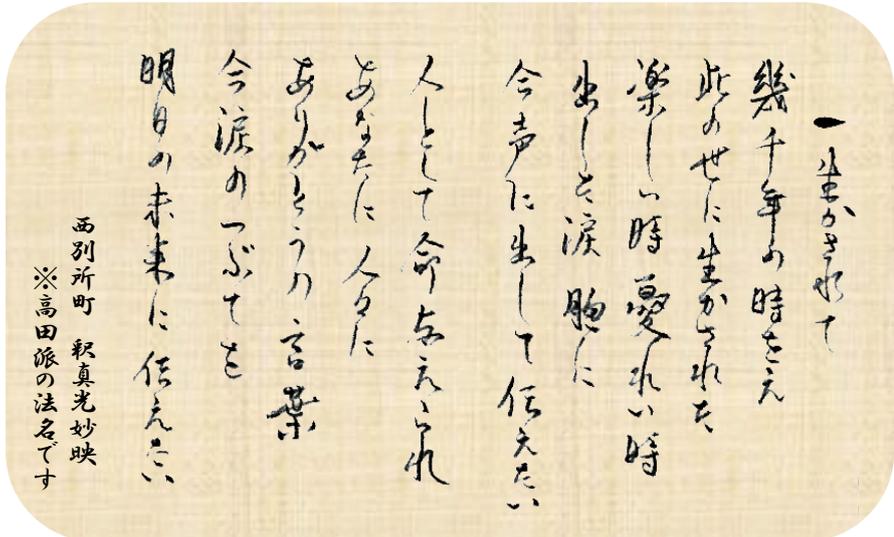
称名は聞名といわれます。称名念仏して、私にかけられた如来さまの願いを聞かせていただきましょう。

(住職)

ご案内

5月30日(土)

十時	前住職二十三回忌法要 前坊守 十七回忌法要 布教 一樂 真師 (石川)
十二時	おとぎ
一時半	真宗布教大会「他力の救い」 布教 大谷義文師 (熊本) 勝部正典師 (大阪) 門川崇志師 (大阪) 川端 覚師 (奈良) 一樂 真師 (石川)
バスが出ます どなたもぜひ!	



西別所町 釈真光妙映
※高田派の法名です

発行

真宗仏光寺派 専念山 **西雲寺**
 住職 護城一寿
 筆頭総代 吉川芳弘
 編集責任者 護城一哉
 〒910-3523 福井市武周町5-2
 電話 0776-97-2138
 メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
 ホームページ http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！

お寺から郵送いたします。どうぞご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。